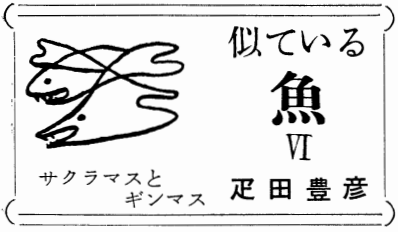
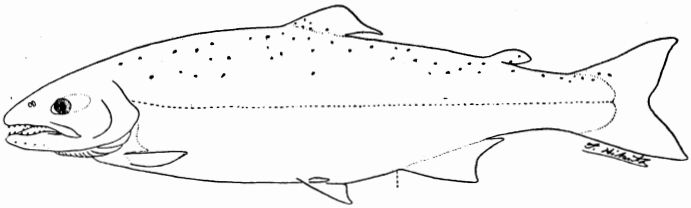
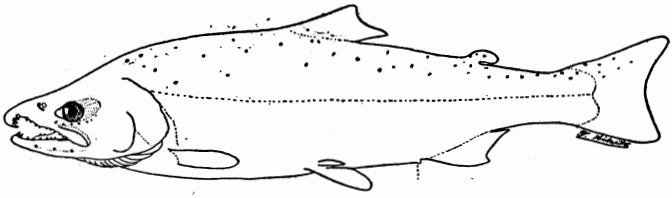


サクラマスとギンマスの2種の太平洋サケ類は非常に外形的に似ている点が多いのであるが，見馴れるに従つて区別がつくようになるものである。実際に孵化場現場係官等はサケを多く取扱う関係で，変つたこれら2種を見あやまることはないのである。しかしながらギンマスは個体によつてサケに似ているものがあるので，サクラマス或いはサケと混獲していても注意しないと見逃がすことが少なくない，と云うのは現に他の調査目的のために集めたものゝ中にも混つていたことがあつた位で，気付かれずに混獲される可能性，そして売買されていることはあり得るものと思つている。サクラマスは現在も北海道及びその周辺水域に数多く漁獲され，食卓の珍味を充二分に与えてくれるのに反し，ギンマスは近年まで数回発見されただけで，北海道では極く稀な魚種である。この魚種は北部太平洋，ベーリング海，アメリカ沿岸に普通に漁獲されている。サクラマスは現在までの調査研究の結果からすれば，北は南部千島附近までが分布範囲になつているが，時には北千島に於いても発見されていることが知られている。ギンマスの北海道内河川に溯上したものに就いては，私も数個体調査したが，このことに関して，先に「魚と卵」の誌上で紹介したことがあるので省略することにする。この両種の習性上にも似た点が少くないようで，サクラマスの稚魚は，生れた年には降海しないで，生れた次の年に降海するものだが，同じようなことがギンマスにも云われる。即ち2年乃至3年位は生れた河川にとどまるために，2年目のものが新しく生れた稚魚を，又3年目のものが，2年目と新しい稚魚を餌じきにすると云う大きな問題が，ソビエットに起きて水産技術者及び研究者を困らせているとの事である。これと似た事が道内河川で多かれ少なかれあるが，現在の処それ程重大でないようである。しかし，或河川で大きな被害を及ぼす事にでもなれば，サケとサクラマスとの同一河川内に於ける孵化放流と云うことは再検討しなければならないだろうし，施策の一考として，サケ稚魚放流河川とサクマス稚魚放流河川とを分けるのもよいと云うことになるかも知れない。養魚を行う人は誰でも，鯉でも金魚でも自分の産んだ或いは同類の卵及び稚魚を同じ水槽に入れておくと食べてしまうことを知つている。いづれも弱肉強食のルールにのつとつた動物的な生命維持にすぎないので，所謂原始的な真理方法と云うことが出来るだろう。サクラマスは北海道に於いては，サケに次いで重要な魚種なため，これを人工的に孵化し，放流を事業面では実施している。又サクラマスには，先に述べたベニマスと同じ様に，生涯を通じ淡水中に棲息するもの

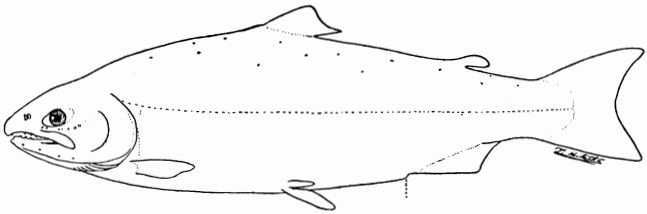
があるが，これをヤマベと云つて，釣士のよい対称魚になつている。ヤマベは現在北海道の大部分の河川の上流の清冽な部分に棲息しているが，全日本を通じ，サクラマスが余り見られないような，九州北部にもヤマベが，採集されるようだが，これは以前にそれ等河川にサクラマスが，産卵溯上したものが，陸封されて残つたものと思われる。サクラマスは地方的に或いは時期的に種々の形態様相を呈するので，主に形から色々の名で呼び馴らされているものである。海洋型のものでは，サクラマスは銀白色であるが，ギンマスは多少暗色がかつた銀白色である。体は一般にズングリしているが，マスノスケ程ではない。サクラマスは産卵期に近づくと，腹側から尾部まで美しい桃紅色を呈するためにサクラマスと称ばれているんだろうか？又体側背面に沿つてギンマス同様の黒色小斑点が少数散在しているが，尾鰭及び頭部にはこれら斑点が無いのが普通である。時に尾鰭に丁度ヒメマスの斑点のように明瞭なものが見い出されるが，そうかと云つてカラフトマスの様な大きな斑紋ではない。サクラマスは主に鮮魚及び塩造にするが，これに対してギンマスは北洋漁業では場所によつて多く漁獲され，罐詰及び冷凍にしている。更にこの両種に就いては今後生態的，形態的に調査研究する必要があるように思つている。



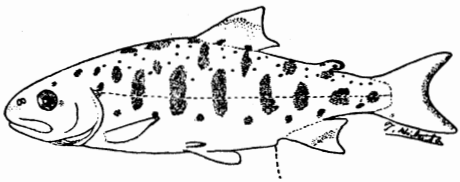
石狩川産サクラマス



遊楽部川産ギンマス（ギンザケ）



北太平洋産ギンマス



陸封性ヤマベ

（調査課　技官）